

夏休み明けの授業

日々、子どもたちを教える先生方が抱えるお悩みの中から一つを取り上げ、解決のためのアドバイスを掲載するコーナーです。
今回は、松永立志先生と安田恭子先生にご登場いただきます。

お悩み

夏休み明け、子どもたちは、一学期に積み重ねたことの多くを忘れてしまっているようです。二学期の学習のスタートにあたって、意識のモチや工夫などを教えてください。



まずは、夏休み後の子どもたちはどんな状態にあるのか、子どもたちの変化をどう捉えればよいのかについてうかがいたいと思います。



鎌倉女子大学 准教授
松永立志

解決のために

1 夏休み明け、子どもは大きく変容しているはず。その心積もりをもって、微妙な変容を逃さず捉えるようにしましょう。

価値観の多様化に伴う変容

家庭や保護者の価値観の多様化は、子どもに大きな影響をもたらします。夏休み明け、一回りたくましさを増したように見える子どもは、水泳や祖父母宅への訪問、家族旅行など、きつと夏を満喫してきたのでしょうか。しかし、色白のまま登校してきた子どもは、塾の夏期講習や屋内でのゲーム遊びなど、さまざまな原因により、生活習慣が乱れてきていることが考えられます。

夏休み中の子どもたちの貴重な体験を学級経営に活用するのは当然ですが、その多様さには注意深く対応する必要があります。例えば、体験したことをスピーチしたり文章に書いたりするという学習活動は、多くの学級で見られるものです。しかし、話題にできないような体験をしていない、話題にしたいくない体験ばかりだったこともあるでしょう。活動に入る前には、子ども

のうえで、体験の内容例を多様に示す、全員に単一の表現方法を課さないなどし、学習内容や方法の複線化を考慮することが重要でしょう。

学校から離れることに伴う変容

子どもたちの中には、長期間、学校生活から離れて生活したことで、夏休み以前に身につけた学習習慣が乱れたり、学習意欲が低下したりするという傾向が見られることもあります。特に、一年生で、学校や学級への適応に退行が起こったときには、いわゆる学級崩壊的な現象が、一時的に見られることもあります。

そこでまず大切なのは、「夏休み前にできていたから、休み明けも同じようにできるだろう」と思わず、「もう一度やり直そう」というくらいに考えるということです。そして、学習や生活のルールなどを再確認したり、新たに作ったりする場を設けることが必要でしょう。休み前の生活や学習の跡が

振り返れるような資料や掲示物を、子どもが常に目にするようにできるよう整えておくことも効果的です。

高学年女子の発達に伴う変容

特に高学年の女子に見られる傾向の一つに、これまで活発で幼い行動を取っていたのに、急にしっとりとした落ち着いた行動を取り始めるという変容があります。加えて、教師のところにあまり話をしに来なくなったり、ひそひそとささやき合いながら目配せをしたりするなど、陰湿と思われる行動も目につくようになります。

これらの変容は、大人に近づくための発達段階の一過程と捉えて、今まで以上に、個人や集団に積極的に働きかけながらコミュニケーションを図るようになります。同時に、学級全体に働きかけながら、学級行事の計画や実施の機会などをうまく使い、明るい学級作りに取り組むことが重要です。

松永立志

鹿児島県生まれ、横浜市教育委員会事務局教育課程開発課長、学校教育部長、横浜市立東小学校校長等を経て現職。小学校学習指導要領解説国語編「作成協力者」。
主な編著書に「小学校学習指導要領の授業 国語科実践事例集 1年／2年（小学館）など。光村図書 小学校 国語 教科書編集委員。

授業の進め方や環境作りなどに関して、意識したいのはどんなことでしょうか。



2 新学期はステップアップのよい機会。教室の掲示や「関わり合い」の授業を意識することで、心地よい国語学習へのいざないを。



元新宿区立西戸山小学校 教諭
安田恭子

二期生のスタートを好機に!

学校生活に学期の節目があるのは、とてもよいことです。なぜなら、今まで学んできたことをステップアップさせたり、うまくできなかったことをリセットして、再チャレンジしたりする機会となるからです。

例えば、新出漢字の学習について、一学期は国語の授業中に全てを丁寧に指導していたけれど、二学期からは、筆順や読み方が特別なもの、組み立てが難しいもの以外は、家庭学習で取り組むよう指示することで、日常の授業が充実します。あるいは、ノートの使い方が適切でなかった児童には、見本を示し、二学期からはそれを見ながら

ノートを取らせることで、児童が自信をもてるようになります。

二期生の国語ひらきでいたいこと

始まりの一週間、何よりも大切にしたいのは、児童一人一人の不十分さを受け止めるようにすることです。否定することは避けましょう。「夏休み中、何していたの?」などと、こんなことが分らないの? などといった言葉は禁句です。

さらに、毎授業の冒頭三分で、学習の基本となるルールを繰り返しチェックします。机の上の教科書・筆記用具等の置き場所、いすに座るときや書くときの姿勢(下図)、きちんとした返事や受け答えのしかたなど、基本が崩



書くときの姿勢については、『国語』教科書の付録(1年上P122)を参考にすることができます。

れたまま学習が始まってしまつと、修正に余計な時間がかかるからです。

また、既習の学習用語や教科書の「たいせつ」コーナーの内容(身につけさせたい力)を簡単なクイズ形式で振り返るのもよいでしょう。例えば、「引用とは、本に書かれていることを、文章や話の中で用いることである。〇か

×か」などと、学習の初めや終わりに一、二問ずつ出題するのも、児童にとってはよい復習になります。

体験や思い出しの、上手な共有のさせ方

「夏休み中、どこかに連れていかないと、子どもが、学校で肩身の狭い思いをする」という、保護者からの声を耳にすることがあります。「夏休みスピーチ大会」などと安易に銘打って行うことで、スピーチが児童の体験自慢大会になってしまうことは、心して避けてはなりません。

例えば、中・高学年ではコース別スピーチを行ってみてはどうでしょう。アート(絵、工作等の話)、サイエンス(採集、実験等の話)、フィジカル(スポーツの練習、試合等の話)、カルチャー(読書、歌、詩作等の話)、トラベル(旅行等の話)などのコースに分かれてグループ内でスピーチをする

といった工夫です。他にも、「夏休み新聞」を作り、自分の成長を報告し合うことも考えられます。

掲示に配慮する

夏休み明けは、どの教室でも、休み中に取り組んだ作品が、「夏休み作品展」と称して展示されます。しかし、九月末に教室を訪れてもまだ、展示がそのままなことがあります。夏休みの作品展示は、長くても二週間。その後、はできるだけ早く、二期生の学習に関わるものへと掲示を切り替えましょう。ひと言感想と自分の名前を書いたカードを貼るなどして交流を見える形にする、掲示が学習の場の一つとなります。

学び合い・関わり合いを考えて

学校で学ぶことのよさは、多くの友人とともに学び合えることにあります。夏休み明けの学習では、学び合い・関

わり合いを大切にして学習を進めましょう。

例えば、教科書には、二期生初めに詩教材が位置づけられています。一人で音読するだけでなく、リレー読み、掛け合い読みなどを多く取り入れ、みんなで協力して一つの音読作品を仕上げることが考えてみましょう。

漢字の学習では、グループ対抗で問題を出し合ったり、得点を競ったりして学ぶこともよいでしょう。さらに、発表・話し合い・討論などの「話す・聞く」の学習では、三人程度のグループ内で発表や話し合いをしたり、グループ対抗で話し合いや討論をしたりするようにします。

協力して学ぶ場を多く設定することで、ともに学ぶ楽しさを味わい、心地よい国語学習に児童をいざなっていきたいものです。

安田恭子

東京都生まれ、新宿区立津久戸小学校教諭をスタートに、西東京市、中野区を経て、新宿区立西戸山小学校で定年退職を迎える。日本国語教師の会、樟の会会員。共著に、「小学校国語科学習指導の研究」シリーズ、東洋館出版社 などがある。

